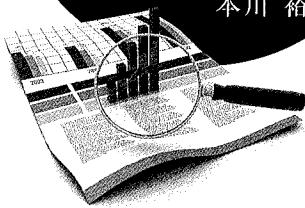


データが語る “いま”

本川 裕



第③回

意識から見ると 経済格差は 広がっていない

かなり前の話であるが「一億総中流化」が話題になったときに必ず引用された内閣府の世論調査がある。「お宅の生活程度は、世間一般からみて、どうですか」ときかれて、「中の上」、「中の下」を合わせて「中」と答えた者が国民のほとんどを占める結果となっていたことでそう言われたのであった。

近年では、所得や資産の不平等感が増しており、貧富の格差は広がっているといわれることが多い。そうであるならば、この意識調査の結果も、「中」が減って、「下」(あるいは「中の下」)が増えているはずであるが、果たしてどうだろうか。

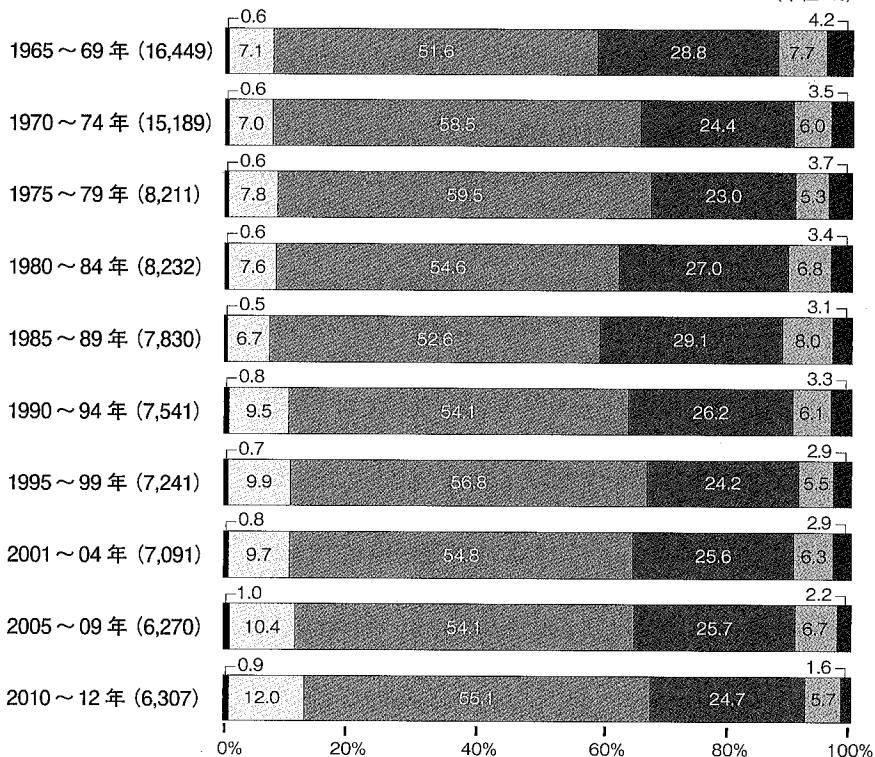
内閣府の世論調査は、サンプル数(回答者数)が多く、わが国における最大規模の意識調査で、テーマを変えて何年かおきに行われる調査と毎年定期的に行われる調査がある。中流意識についての調査は毎年実施される「国民生活に関する世論調査」のなかで行われている。毎年の動きには変動があるが、ここでは、長期的なトレンドを見たいので、5年ごとの平均値を計算し、帯グラフにして時系列変化を探った。

参考までに、間違いなく「下」に入ると考えられる生活保護の対象者の対人口比を示すと、2010年には1.5% (直

図表 中流意識の推移

お宅の生活の程度は、世間一般からみて、どうですか。

■ 上 ■ 中の上 ■ 中の中 ■ 中の下 ■ 下 ■ わからない
(単位:%)



(注)ほぼ毎年の調査結果の単純平均値(1998年、2000年は調査なし)。カッコ内は回答者数(年平均)。

(資料) 内閣府「国民生活に関する世論調査」

近の「下」の5.7%の約4分の1)であり、1995年の0.7%と比べて倍増している。

一方、世論調査の推移は一目瞭然。総中流化という特徴は変わっていない。また、「中の上」が増え、「中の下」や「下」が減少という傾向が長期的に続いている。さらに、貧困の増大や格差の拡大が進んだとされる小泉政権(2000年代前半)以降でも、にわかに「中の下」や「下」といったいわゆる貧困層(あるいは貧困層と自認している層)が増えているわけでもない(むしろ減っている)。

最近目立っているとすれば「中の上」の増加であり、格差が増大しているとすれば、少なくとも意識上は、貧困層の拡大というより、中堅富裕層の拡大だけが進んでいると考えざるを得ない。「中の上」が増加しているのは、社会全体が貧しくなっているといわれているので『中の上』くらいの生活程度だった人が、より上位と感じるようになったためではないか」という見方もある。

格差拡大という近年の論調とそぐわないこの世論調査結果は、そのためもあってか新聞も識者も引用しない。



ほんかわ・ゆたか

東京大学農学部農業経済学科出身。(財)国民経済研究協会常務理事を経て、アルファ社会科学(株)主席研究員。現在、幅広い分野の統計データをグラフ化して公開する「社会実情データ図録」サイトを主宰しながら、地域調査等に従事。著作は「統計データはおもしろい!」、「統計データはためになる!」(技術評論社)など。